

I-18

ホーデフリート・ハークと一七世

紀の日蘭交流における薬草学につ

いて

ヴォルフガング ミヒエル

一六五〇年代以降の紅毛流外科の普及は、国内外の薬草研究に大きな影響を与えた。始まりは、紅毛流外科の祖とされる出島蘭館医カスパル・シャムベルゲルが日本を離れた直後の一六五二年の本草書の注文である。オランダ東インド会社の資料には、その後も繰り返しのよな本草書の注文と納品の記録が見られる。また、出島商館のヨーロッパ人たちは年に一回長崎とその近郊への日帰り遠足が許可されていた。この機会に日本側は蘭館医から地元の薬草についての情報を得ようとしていた。一六六六年、幕府は東インド会社に対し、薬草に詳しい人物を派遣し、薬草の種子や苗を送るよう要請する。翌年、若い薬剤師ホーデフリート・ハーク (Godertfried

Haack) が長崎に着任した。長崎奉行・松平甚三郎の要請で、ハークは一六七〇年、阿蘭陀通詞らとともに長崎周辺で数回にわたり植物の調査を行った。通詞による報告書の写本として、二度の調査結果が伝えられている〔薬草の名並和の扣〕。一回目の調査では二四種、二回目の調査では一二種の薬草を見つけることができた。

一六六八年以降、東インド会社は薬草の種子や苗を納入している。一六七〇年に納入されたものには、解説付の目録が添付されていた。これはハークの助けを借りて日本語に翻訳された。ハークは植物の多くが、オランダからではなく、イタリヤ、トルコ、エジプト、ジャワ、その他の東インド地域から来ていると説明した。翻訳作業は困難を極め、通詞たちの出島商館での本来の仕事が滞るほどだった。植物の種子の発芽能力に問題があったためか、長崎奉行が新しい種子の納入を要請している。同年夏、ハークは長崎奉行の要請で、自分の生誕地、両親、教育、旅行、外国語や植物の知識について詳しく述べなければならなかった。また日本でこれまでよりもさらに多くの植物を見つげられると思うかどうか質問を

受けた。ハークは一五歳のときから薬局で働き、四〇〜五〇種の薬草を知っていた。

彼は奉行や通詞たちが、彼の人柄や能力に対し疑念を抱いていたことを感じたようである。一六七一年初頭、彼は日本での勤務を解いてもらうよう申請した。バタヴィアの上司はこの申請を認め、後任者として薬剤師フランス・ブラウン (Frans Braun) が日本へ派遣された。

しかし驚くべきことにハークの名は一六七二年にも出島商館日誌に記載されている。彼は今度は商務助手となり、商人としてのキャリアを追求することになった。ハークが最終的にいつ日本を去ったかは明らかではない。

一六七〇年夏に彼が行った日本の植物の調査に関する通詞の報告書は、二六年後に『阿蘭陀外科指南 (元禄九刊)』の中の『薬草口訣』という名で出版され、一般に知られるようになる。

(九州大学大学院言語文化研究院)